



■第12回非開削技術講演会を開催

7月27日JSTTは発明会館（東京・虎ノ門）において「非開削技術と耐震性」のテーマで講演会を開催した。講演は、水道分野から神戸大学工学部建築学科高田至郎教授に「水道管路と耐震性」、下水道分野から日本大学理工学部土木工学科田中和博教授に「地震と下水道～新潟中越地震から学ぶもの～」、ガス分野から東京ガス株防災供給グループ中根宏行マネージャに「ガス分野での耐震化や地震被害減少への取り組み」について行われた。その後のパネルディスカッションでは田中教授、中根マネージャ、高田教授からバトンタッチして(社)日本水道協会石井健叡工務部長が水道分野の代表として参加。コーディネータにはJSTT石川副会長が務め、会場の聴講者を含めた活発な意見が交わされた。（詳細は本誌33pにて）

下水道展の2日目という日程ではあったが150人の参加者で大盛況のうちに終了した。



■非開削技術見学会 超大口径推進現場見学

8月25日非開削技術見学会を開催した。見学先は千葉市と横浜市の超大口径管推進工事現場でバスにて1日の内に2現場を視察しようという企画である。バスの都合上、定員を30人と限定しての募集であったが、募集早々に定員オーバーし最後にはお断りするほどの人気振りであった。詳細は61ページで本誌編集企画小委員会委員がレポートしているが両現場とも2m以下の低土被りで外径4000mmを超える推進工事という高水準の技術を要する工事現場であった。

参加者も大変興味深く見学し現場担当者に質疑を繰り返していた。超大口径推進管の日本で最初の現場と

いうことで今後の基礎となる工事であり、施工報告が待ち遠しいと参加者の声もあった。



9月1日付水道産業新聞に記事掲載された

■HDD工法施工見学会開催

9月7日から8日にかけて、群馬県館林市の関根工業の敷地においてJSTT主催でHDD工法施工見学会を開催した。工法の説明会は隣接の公民館で行われ、7日は石川副会長、8日は松井会長がそれぞれ開会のあいさつを行った。つづいてHDD工法の概要説明を森田事務局長が行い、HDD工法に有効な水道用ポリエチレン管の特長を水道用ポリエチレンパイプシステム研究会奥村技術委員から、水道への普及について配水用ポリエチレン管協会栗尾技術委員からそれぞれ説明があった。

その後7日は、テストフィールドにてデモ施工を8日は農業用配水管の本施工を実施した。また、既設管を破碎しながらポリエチレン管に更新するパイプバースティング工法のデモもあった。

展示会場では、国内に導入されている5機種のHDDマシンや管材関連、パイロット削孔時に位置計測に使うロケータ、パイプバースティング機などデモ機やサンプルパネルを使い、工夫を凝らした展示が目についた。

他県からの参加も多く2日間で220人を超える参加者となり、HDD工法への関心が高いことわかる。



9月8日付日刊建設工業新聞に記事掲載された



9月14日付環境新聞に記事掲載された

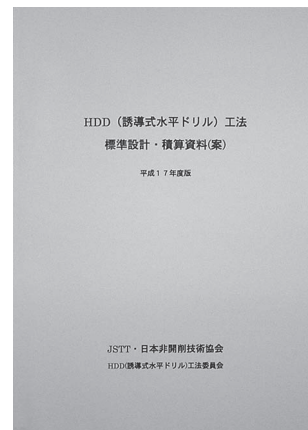


建設通信新聞に記事掲載された

■HDD工法標準設計・積算資料（案）を発行

HDD工法委員会は、このほど日本で最初のHDD工法標準設計・積算資料（案）を発行した。昨年、HDD工法普及戦力検討会として技術用語の統一や設計基準の標準化を目指しスタートした。今年度からHDD工法委員会を設立し委員会として最初の目的を達成したことになる。今後、HDD委員会としては今回の標準設計・積算の見直しと、更なる工法の普及と技術の向上を目指していくこととなる。

HDD工法標準設計・積算資料（案）の詳しい解説については次号（No-Dig Today 54号 2006年1月1日発行）にて特集を組む予定である。



■CTSTT（台湾非開削技術協会）から視察団が来日

下水道展'05東京開催期間中の7月27日に洪武義CTSTT常務理事はじめ25名が視察団として来日した。一行は下水道展の視察と日本における非開削技術施工現場の見学を目的としており、同日は午前中に茨城県内で推進工事現場の見学した後、午後から首都高



速中央環状新宿線の施工現場を見学に来てきた。

今回、一行が見学したのは切開き工事の中でも先行切梁工事といって2本の近接施工するシールドトンネル躯体の変状を抑制する目的のもの。施工に使われているのは泥水式小口径推進機アンクルモールエクスィード。推進距離約8～12m×35本を到達精度3cmという非常に高精度の推進技術が必要とされる現場である。工事詳細については本文44ページで詳しくレポートしているのでここでは省略する。

視察団一行は、工事事務所において工事概要の説明をうけ、現場見学へと向かい熱心に視察して回った。見学現場である本町立坑は山手通と方南通りの交差点である清水橋交差点付近の非常に交通量の多い場所にある。立坑を降りた一行は直径11.5mのシールドマシンが回転するためにつくられた長さ20m×幅30m高さ15mという巨大な空間が地上の交通量の多い交差点の下にあることに驚きの声を漏らしていた。先行



切梁工事の現場に進むと掘進機関連の機械から発せられる轟音にも負けず現場担当者の説明に聞き入りその都度熱心に質問をしていたのが印象的であった。

地上にあがっても現場担当者に熱心に質疑する姿が見られた。最後に「大変有意義な見学ができました。感謝申し上げます。」と洪武義CTSTT常務理事の挨拶とともに一行は帰途に着いた。

■ものづくり日本大賞で「SPR工法」が経済産業大臣賞を受賞

総理大臣表彰「ものづくり日本大賞」の創設について経済産業省のホームページには、我が国産業・文化の発展を支え、豊かな国民生活の形成に大きく貢献してきた「ものづくり」を着実に継承し、さらに発展させていくため、最先端の技術から伝統的・文化的な「技」まで幅広い分野において中核を担う中堅世代のうち、特に優秀と認められる人材（「ものづくり名人」）に対して、内閣総理大臣が表彰を行う制度「ものづくり日本大賞」を創設するとある。

全国から600点の応募があり厳しい選考の中からSPR工法を含む17技術に第1回経済産業大臣賞が贈られた。9月3日に都内ホテルにて表彰式がありSPR工法からは足立建設工業の秋元榮器氏、村木健二氏、内田広治氏、山城浜夫氏、積水化学工業から北山康氏、菅原宏氏、今川明氏、渡辺充彦氏、高谷明彦氏の9名が受賞。賞状と記念のメダルが授与された。SPR工法の詳細についてはNo-Dig Today 52号（2005年7月1日発行）9～18pを参照。



SPR工法 経済産業大臣賞授賞式にて